新聞ＯＢ
「九条の会」

２０２６年２月２６日　第１５９号　【部内資料】

〒113-0033 東京都文京区本郷２丁目１７番１７号 井門本郷ビル６Ｆ
新聞労連気付　TEL　03(5842)2201 FAX　03（5842）2250
（郵便振替口座）新聞 OB「九条の会」00130-０- 334661

日本国憲法
第二章　戦争の放棄
第九条①　日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。
②　前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

九条破壊の危機！

自民党大勝を梃子にした、高市政権による改憲、戦争体制加速化の攻勢に立ち向かおう！

九条の会は２月14日、会報第４７５号で左記の訴えを発表しました。（関連記事４面に）

通常国会冒頭の解散、総選挙によって自民党が大勝し、単独で衆院の３分の２を超える議席を獲得しました。

高市首相は直後の２月９日の記者会見で「国民の皆さまから政策転換をなんとしてもやり抜いていけという力強い形で背中を押していただいた」と称して、安保３文書の改訂によるＧＤＰ比２％を上回る大軍拡、非核３原則の改悪、中距離ミサイルなど攻撃用兵器の配備促進、国家情報局、対外情報庁の設置、スパイ防止法制定をはじめとする戦争体制づくりを加速化する方針を改めて強調しました。

それにとどまらず高市首相は、「この国の未来をしっかりと見据えながら、憲法改正に向けた挑戦」を進めると明言し、質問に答えて、「各会派の協力も得ながら改正案を発議し、少しでも早く国民投票が行われる環境を作っていけるよう…取り組んでいく」と明文改憲への意欲を表明しました。

高市内閣は、自民と維新の会の連立政権合意において、それまでの実質改憲先行戦略を転換し、実質改憲と明文改憲を同時に並行して追求する方針に転じましたが、衆院選の結果を踏まえて、この方向を加速する構えを見せたと言えます。

自民党大勝を受けて、衆院憲法審査会のメンバーも改憲派が圧倒する状況に変化します。こうした高市内閣による軍拡・戦争体制づくり、明文改憲の企てを阻むため、市民が、国会の外から声をあげていきましょう。

激変を乗り越え、改憲・戦争準備反対の大波を！

事務局長
山口文昭

高市政権による厳冬でしかも国民生活が苦しいなか、大義なき解散総選挙の暴挙に打って出ました。結果サナエブームに乗ったとは言え自民党は単独で３分の２を超える３１６議席の想像を絶す議席増となりました。選挙戦では具体的政策も語らず「論戦を回避し逃げて逃げて逃げて」の白紙委任を求めました。争点であった統一教会との癒着、政治と金、裏金議員の大量公認、トランプ大統領の意を受けた大軍拡、さらに非核三原則見直し、スパイ防止法制定、外国人排外主義にほとんど触れることなく白紙委任の取り付けに成功したと言えます。しかし、今回の選挙で自民党は得票率49％で獲得議席86％と極端な議席増となり民意の反映に程遠い選挙制度と言えます。

一方、野党の立憲と公明による「中道改革連合」は３分の１以下の49議席と壊滅的な打撃となりました。これは野党第一党の立憲民主党が危機感を持った結果、公明党と組み新党「中道改革」という枠組みをつくらざるを得ない状況に追い詰められた苦肉の策と言えます。

市民と野党の共闘の要である安保法制を合憲とし原発再稼働容認へ転じ公明党に引きずられた結果多くの支持者から見放されたとも言えます。大量の落選者を生み思惑は外れました。

しわ寄せはすべて立憲民主党系の候補が被る結果とになりました。昨年の世論調査で立憲の支持率は４・５％だったのに対して、国民民主や参政が支持率を伸ばし、この時点で立憲の支持率に肩を並べ野党第一党の存在感を失っていました。

年代別の支持率では立憲の18～29歳の支持率「０％」であり、30代の支持率もわずか１・４％となっていました。この若年層の人気のなさが立憲が公明と連携する大きな要因だったと想像します。

中道改革を建て直すべく代表選が行われ小川淳也氏が新代表に選出されましたが「改憲はあり得る」との発言は前途多難と言えます。

今こそ、自維を軸とした改憲勢力の数を背景にした改憲、大軍拡加速に待ったの声を上げるときです。改憲に反対する勢力が一致結束し学び励まし行動し、戦争の無い平和な社会実現をめざし、市民と野党の共闘のつながりを強め改憲や戦争準備に反対の大波をつくって行きましょう。

宇野　靖之

自民圧勝
新聞は何を伝えたか

田原　恒男

今回の総選挙は、極めて異常なものであった。通常国会冒頭の衆院解散は60年ぶり、解散から投開票まで戦後最短の16日間で高市首相の「自己都合解散・総選挙」と厳しく批判された。しかし、結果は、自民党が単独で三分の二を超える議席を確保する圧勝であった。戦後初めての異例の結果を新聞は、どう受け止め発信したのか検証してみたい。

絶対的多数の中身

実績ゼロ、具体的に何も語らない高市自民党が圧勝した要因は何か。「高い内閣支持率を背景に政策論争よりも党首の『人気投票』に持ち込んで、自らの権力基盤を固める」（朝日）という首相の思惑と「『物価は上がる。給料は上がらない』『国際情勢の不安定』。重苦しい時代に首相の乱暴さが有権者に大きな風穴を開ける大胆さや突破力として映った」（東京・筆洗）が重なり合ったこと。さらに自民党の候補者が足りずに他党に議席を譲るという事態まで起きた高市旋風の「強さ」を各紙が指摘する。同時に論戦抜きの圧勝が「首相続投への支持が、政策丸ごと信任したことにならない」（朝日・松田政治部長）、「今回の圧勝は首相への『期待値』に過ぎない」（読売・川嶋政治部長）と圧勝の脆さを指摘せざるを得ない。そのため「合意形成に努める」「丁寧な説明と理解を広げる努力」「独断専行を排して」と各紙が高市政権に求めるが、果たして期待が通用する高市政権か。

選挙後の記者会見で「国論を二分する政策と云うが、その中身を語ることが少なかったのではないか」と記者に問われた首相。「最初から最後まで時間を割いて訴えてきた」と開き直った。

やはり新聞は希望的付度でなく危険性を指摘し、国民に高市政権の動きを監視し声をあげることの大切さを伝えるべきであった。

宇野　靖之

これからが正念場

絶対的多数を獲得した自民党。この状況を背景に第二次高市政権は、①積極財政の推進②大軍拡の実現③憲法改正の発議④インテリジェンス（情報活動）の機能強化に全力をあげることは必至である。注意すべきは、朝日新聞と東京大学研究室の共同調査で衆議院当選者全体のうち改正賛成93％、「自衛隊保持の明記」が80％に激増している点である。「改正翼賛体制」になっていると云っても過言でない。しかし、選挙の結果は改憲が支持された訳ではない。改憲に反対する世論の広がりを作っていく我々の運動が正念場を迎えたと改めて確認したい。

この運動の中で「中道改革連合」の動向は要注意である。選挙で惨敗したが「長く与野党に分かれていた両党が共通理念の下に結集したことは、政治の新しい動きとして歓迎したい」（東京新聞）との指摘もあるが、果たして歓迎すべき動きかどうか疑問である。

今回選出された小川淳也新代表が自らの発言の取り消しに走る現実を前に疑念が深まるばかりだ。頭から否定するつもりはない。今後の動きに注目したいと思う。

何だこれは！

何だこれは！「〝サナエ旋風全開〟自民新人当選ラッシュー」が飛び交った。日本列島自で真っ赤に埋め尽くされた。これは2月9日付の読売新聞が、自民党の大勝を伝える紙面である。

思わず脳裏に浮かんだのが「君死にたまふことなかれ」。

あゝ立憲民主党よ、君を泣く　中道改革連合を守るためだとて　君死にたまふことなかれ―だった。

高市首相は〝選挙で信任を得た〟と、9条改憲、大軍拡、国民監視の「スパイ防止法」などを強引に進めるでしょう。反対の声を上げていきましょう。（斎藤）

新聞ＯＢ「九条の会」結成 20 年記念の取り組み

新聞ＯＢ「九条の会」は２００５年結成から20年の節目を迎えました。会報の特別号を発行したいと思います。

いま、総選挙の結果で大軍拡と９条改定の動きが急です。この状況をこう考える、声をお寄せください。

結成からこれまでの運動とこれからの発展強化にむけ、皆さまの積極的なご意見、提案もお願いします。

５００字ほどで自由にお書きください。

同封のハガキでお寄せください。**３月20日締切厳守**です。

声をあげれば日本は変わる

老来 老(朗)話

（最終回）

戸塚 章介

終の棲家（ついのすみか）となった千葉県松戸市

松戸に住んで62年になる。１９６４年に結婚して住宅公団（現ＵＲ）の常盤平団地に入居した。女房が都内の団地に住んでいたため、競争の激しい抽選など無しに横滑りで入れた。団地に入るのは当時の人々のあこがれの的で、団地族などという言葉もあった。

最初の部屋は１ＤＫだったが、２年後に長女が生まれたので２ＤＫに移れた。それなりに安定した住まい環境だったが、私の親が高齢になったので同居することになり、それにはやはり手狭だ。そこで６年後、常盤平駅の反対側の地目山林という新興住宅地に土地を買って引っ越すことに。家は建ったが、トイレは汲み取り、下水は穴を掘った吸い込み式、水は地下水の井戸、ガスはプロパンという住環境としては劣悪。下水穴はすぐ吸収能力がなくなって外へ溢れた。同時入居のご近所さんと話し合い、地元選出の共産党市議の協力も得て、行政に要求を出し、署名活動などでたたかった。すぐさま住民の要求が通り、下水は浄化槽方式に、水道、ガスも完備された。

地域での活動が評価されたのか、たまたま適任者がいなかったせいか、多分後者だと思うが、２００２年には共産党推薦で松戸市長選に出馬した。全くの新人だったにかかわらず、１万７２００票（13・5％）の支持をいただいた。お礼というわけではないが、地域の党後援会長を30年続けている（高齢のため今年引退しようと思っているが）。

松戸は江戸川をはさんで東京都に接している。しかし、隣の柏市などに比べて都会的センスに欠けているといわれている。確かにそうかも知れないが、半世紀以上も住んでいれば、愛着がある。終の棲家として、ほんとによかったなあと思う今日この頃である。

しばらく続けてきた「老来　老(朗)話」ですが、タネも尽きたのでこの辺で店仕舞いしたいと思います。つたない絵と勝手気ままな文章に付き合っていただいた皆さん、ありがとうございました。

情感あふれる文と絵で楽しませてくれました。この欄は2年余、17回の連載を持って終了します。戸塚さん、お疲れさまでした。ありがとうございます。

幕末の水戸の殿様の別邸　戸定邸

寅さんがひょっこり現れそうな矢切の渡し

漢和閑話

宇野 靖之

平和

今回の総選挙の結果、高市政権が憲法９条改悪をはじめ、「戦争国家づくり」を進めるという点で、戦後かつてない危険な状況がうまれています。私たちは憲法９条のもと、平和国家への道を愚直に歩んできました。今こそ、幅広い市民、政党との共闘でこの難局をはね返していきたいですね◇今回、漢話・閑話コーナーは、平和の「平」について、白川静先生の本などを参考に書きました◇漢和辞典で「平」をひくとすぐ隣に旧字の「平」があります。「平」は「于」と「八」を合わせた形の文字です。「于」は手斧（ておの）の形。「八」は木片のこと。つまり、手斧で木を平らに削って木片が左右に飛び散る形が「平」という字になるのです。削った木片が飛んでいる様子なら旧字のように「八」のほうが左右に散っている感じがありますね◇蛇足ですが、小生が長野にいたころ、「平林」という地域があり、囃子（はやし）詞（ことば）的に「たいらばやしか、ひらりんか」「いちはち、じゅうの、もーくもく」などと言っていたのを思い出しました。後段の「一、八、十のー」が旧字の「平」を言っていますね◇木を平らにするところから「たいら」の意味になりました。「平定」は平らげること。「平安」は無事でおだやかなこと。「平和」は戦争がなく、世の中がおだやかなことです。

国民は戦後80年、平和憲法を守り抜いてきました。

衆院選挙で改憲派が多数を占めました。この状況にどう立ち向かうか。会報も正面から取り組みます▼九条の会の訴えと講演会の資料編を情勢討議におおいに活用しましょう▼本会は結成20年になりました。この機会に皆さんの声を大募集します。〝声をあげれば日本は変わる〟です。同封のハガキでお寄せ下さい。メールでもＯＫです。（斎藤）

資料編

九条の会事務局主催の講演会開催

1月31日、文京区民センターで、九条の会事務局主催の講演会『高市政権の改憲策動に抗して』が、開催されました。この講演会の内容を会報から引用、会報用に組み替えました。情勢討議に活用しましょう。

・第1講演
『高市政権とは何か―そのねらい
・危険性と弱点』　――渡辺　治

1つ目の講演は渡辺治さんの「高市政権とは何か」と題する講演でした。講演は、「今なぜ高市政権か」という問いをたて、右翼政治家であり自民党内でも傍流にいた高市氏が自民党総裁に就任し、政権を樹立した原因を次のように指摘しました。

高市氏が総裁に就任し政権を担った背景には、自公政権が30年近くにわたり推進してきた新自由主義政治による暮らし破壊への国民の怒りが昨年の参院選における自民党の大敗を招き、自民党政権の継続のためには、政治の「転換」が不可欠となったことがある。

ところが、自民党に代わる政党として有権者の多くが選んだのは、一貫して新自由主義の転換を主張してきた共産党や社民党など立憲野党ではなく、消費税減税、積極財政を掲げ新自由主義政治の克服を標榜しながら新自由主義の延命をはかる国民民主党、参政党などの「新手の新自由主義党」であった。しかもこれら政党は、自民と並んで、改憲軍拡の推進を謳っていた。

そこで、自民党は、政権を維持しつつ新自由主義の延命と軍拡、改憲の加速化をはかるため、これら新手の新自由主義党の路線に右転換し、国民、参政、維新などとの右翼連合をねらった。

そうなると、早くから減税、積極財政による新自由主義の修正と軍拡、改憲による軍事力強化、靖国参拝や皇室の男系維持のための養子制度などの右翼的主張を繰り返してきた高市氏が、自民党の右転換に相応しい人物として総裁に押し上げられたのです。

続いて講演では「高市政権は何を狙うか」という問いに対する検討に入り、自民と維新の連立合意に基づく高市政権は、4本柱の悪政の実現を目指す、戦後最悪の右翼反動連合政権だと断定しました。

高市政権の第1の柱は、新自由主義の修正による延命政策です。高市政権は消費税減税や積極財政という新自由主義の手直しを前面に掲げて支持を取り付けながら、新自由主義の維持のため、医療費、社会保障費の乱暴な切り捨てを企てています。

第2の柱は、高市政治の本命である軍拡・戦争体制づくりと改憲です。安保3文書の前倒し改定によって、トランプ政権が圧力をかけている対GDP比2％超の大軍拡、非核3原則の改悪、敵基地攻撃力の配備、スパイ防止法制定、国家情報局、対外情報庁創設などの実質改憲と同時に、明文改憲の実行に乗り出そうとしています。

第3の柱が、選択的夫婦別姓の否定、外国人規制の強化、国章損壊罪などの反人権立法。

第4の柱が衆院議員定数削減などの反民主主義政治です。

そして講演では高市政権の政治が抱える矛盾として、高市政権による新自由主義の手直しでは暮らしは良くならないこと、また高市政権の遂行する改憲・軍拡は戦争への道を引き寄せること、さらに軍拡は高市政権が力を入れる新自由主義手直しのための財政をも圧迫することを指摘しました。

最後に、しかしこれら高市政権の政治の矛盾を顕在化し高市政権を追い詰めるには、市民の運動が不可欠であると強調しました。

・第2講演
『高市政権の危険な憲法政策』
――小澤　隆一

小澤隆一さんの講演は、渡辺講演が高市政権の政治的狙いの検討であったのに対し、その政策の憲法的側面からの検討を行うものでした。

講演は、第1に今回の衆院解散の憲法的問題に触れました。小澤さんは、高市政権による衆議院解散は、メディア等で『自己都合解散』『自分勝手暴走解散』などといろいろ言われているが、過去の自民党政権において、『自己都合』『自分勝手』ではない解散はなかったと指摘し、また『解散権の濫用』という批判はそのとおりだが、濫用をさせないためには、選挙で負けさせるしかないと指摘しました。

その上で、小澤さんは、今回の解散は、してはならない〈禁じ手〉であると指摘しました。それは今回の解散が冒頭解散であり、予算審議に支障を与え、暫定予算を不可避にするからであり、暫定予算では新規事業への支出を行うことができないこと、また予算の迅速な審議決定の必要を口実に衆議院で拙速な予算審議による大軍拡予算が一気呵成に通される危険性があると指摘しました。

また、今回の選挙を、『高市政権選択選挙』という論調が強いが、有権者が選ぶのは首相ではなく、〈全国民の代表〉たる議員であることも強調しました。続いて、講演では、高市政権の危険な憲法政策の検討に入りました。

講演は第1に今回の政権の出発点となった自民党と維新の会の連立政権合意の重大性を指摘した後、改憲政策についての検討に入りました。

政策合意の中でも注目すべきは、両党による条文起草協議会の設置であり、憲法審査会に、条文起草委員会を常設することが狙われていることが指摘され、同時に、同じ改憲派内でも大きな違いがあること、改憲政党も一枚岩ではないことにも注目する必要があることが指摘されました。

また、安保・外交政策の問題に関して高市「存立危機事態」発言に関わって、講演では、法学的には台湾は独立国ではないので仮に中国に攻撃されたとしても、それは『内戦』にとどまり、日本やアメリカが乗り出す正当な根拠がないと指摘されました。

また『スパイ防止法』に関して、準備されている法案は、いわゆる『密偵』対策というよりは、『セキュリティ・クリアランス』絡みのものと考えられるとし、〈秘密〉ではなく、秘密に関わる〈人〉を対象にして網をかけようとするものだと指摘されました。

連立合意で唐突に打ち出された、衆院の議員定数削減について、講演は「ありえない政策だ」と断じました。削られるのは民意であり、もともと手薄な立法機能がさらに弱くなることが指摘され、むしろ議員の数を増やすべきだと強調されました。

最後に、小澤講演は「私たちは何をどうすべきか」と問いかけ、高市首相がテレビ番組で「自衛隊が台湾有事から逃げたら日米同盟が壊れる」との発言をひいて、まさしく、今、9条か日米同盟かが正面から問われていると訴えました。

高市政権は、80年目にして戦後最悪の〈憲法破壊政権〉であり、絶対に止めなければならないこと、そのため、9条の会は、今が踏ん張り時であり、国民全体が、日本国憲法の意義を〈我がもの〉とすることが勝負の決め手となることを強調して講演を締め括りました。

・閉会挨拶とよびかけ　――高田　健

質疑応答の後、講演会の最後に、高田健さんから、閉会挨拶と呼びかけがありました。

高田さんは、九条の会のこれまでの20年間の活動は戦争を〈できる〉国にする動きへの対峙だったが、高市政権の誕生で戦争に〈備える〉国、戦争を〈する〉国への対決に、九条の会運動の性格が変わってきていると指摘しました。

高田さんは特に、改憲に関する新たな動きに注目し、中道改革連合の中に憲法に自衛隊明記を容認する動きが台頭していること、そうなると総選挙の後の憲法審査会メンバーの大幅な入れ替えとも相まって審査会での議論が今までのように憲法に自衛隊を書き込むか否かの対立から、どこに自衛隊を書き込むかという論議に移行する危険が出てきたことを指摘しました。

最後に、高田さんは、国会外の世論をどうやって作るかの重要性を指摘し、市民と野党の共闘が困難に立ち至っている現在、九条の会がその先頭に立って頑張ることで、市民と野党の共闘を、もう一回再建したいと訴えて挨拶を締め括りました。